野の花新聞

No.4　9月10日号　「萌」

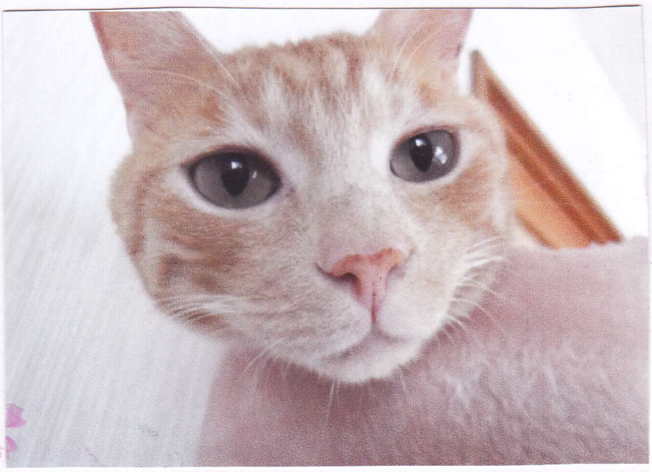
　みなさま、こんにちは。
「野の花」の　みなかた　あきこ　です。
空が秋の色になってきましたね。
あんなに猛威を振るった夏が、
あっという間に色褪せていきます。
勢いのあるものが、その力を失っていくのは、
美しくて哀しいものだなあと
つい　詩人になってしまいますね。

南方　萌
（みなかた　もえ）
ミニチュアダックス
享年５才
すばると
いつもくっついて
遊んでいました。
私の膝の上が
一番好きだった子。

　先月に続き、動物の話をさせてくださいね。
我が家にはもう一匹、ミニチュアダックスがいました。
もえ。リンパ腫で逝った子です。
2才半の時、肺にピンポン玉大の腫瘍が見つかりました。
最初に診察した獣医さんは、「この若さでこの大きさでは
まず助からない。安楽死という選択もありますよ」と。
何も考えられず、黙って病院を出ました。暗い道で、もえを抱いて泣いた時、まだ何の症状も出ていなかったもえは、「どうしたの？」と言いたげに顔をなめてくれました。この子を死なせるわけにはいかない、と次の日から必死の病院探しが始まり、ついに　大阪府大で治療をしてもらえることになったのです。半年間、毎週休みを取って通いました。
寛解期に入り、家で元気に過ごせたのは一年余り。再発・・・全身に転移していました。また毎週の通院が始まりましたが、もえも、私も、私のお財布も、くたくたでした。もえは、採血や点滴がこわくて、大学が近づくと震えだします。それまでドライブを楽しんでいたのが、高速を降りたあたりから私の膝に乗ってくるのです。病院に着いて診察台に上がると、ぬいぐるみと化し、まったく抵抗もせず動きもしません。点滴の間2時間ほど、私は外で待つのですが、獣医さんに抱かれたもえは、目だけで訴えるのです。「おいていかないで」抗がん剤でももう抑えることはできないほど、リンパ腫は広がっていました。少しずつ少しずつ、もえの生命の灯は小さくなっていき、私が仕事から帰宅する直前に、もえは旅立ちました。最期の時に、抱きしめてお別れを言うことも叶わなかったのです。

食欲がなくて食べられない時、フードを前にして　すまなそうにもえは私を見上げていました。その度、私は「もえちゃん、食べなあかんよ」と励ましていました。
　もえ、ほしくなかったら食べなくていいよ、注射がこわかったらしなくていいよ、どんなに短くても、
　もえちゃんは十分に、十分に生きてくれたから、治療がつらかったらもうしなくていい・・・
そう言ってやればよかった。私は、もえに生きていて欲しくて、どうしても手放せなくて、つらいことを強いてしまったのではないだろうか・・・4年経った今も　心が痛んでいます。

でも、今は星の国で駆け回っているのでしょう。跳んだり走ったりがほんとうに好きな子でしたから。



動物を飼う時、責任を持つ覚悟、その死を受け入れる覚悟、飼い主として多くの選択をしていく覚悟、たくさんのことを　もえは教えてくれました。
もえちゃん、ありがとう。
今も　あなたはうちの大切な家族です。

南方　風（みなかた　ふう）
猫ミックス　３才
とても怖がり。
ピンポンが鳴ると行方不明になり、
お客さまが帰るとどこからともなく現れる。